

琉球大学開学70周年記念事業地域連携企画展

地域に根ざした 考古学・博物館学の実践的教育

琉球大学国際地域創造学部
主税英徳（考古学研究室）

これまでに琉球大学考古学研究室が行ってきた活動のなかで、
①沖縄県大宜味村 ②沖縄県南風原町との地域と連携した
「考古学・博物館学の実践的教育」の例を紹介します

調査に必要な技術を習得する考古学実習 (2021年度)

大宜味村との連携事業

根謝銘グスクの調査

大宜味村

- ・ 沖縄本島北部に位置する
- ・ 「長寿の里」、「シークワサーの里」などとして知られる
- ・ 人口約3,000人

大宜味村との連携事業

根謝銘グスクの調査と現状

- 大宜味村では、「根謝銘グスクを核とした保存活用」について、歴史文化を活かしたむらづくりの基本的な考え方を定めた**大宜味村歴史文化基本方針**（平成22年策定）の一つにあげている。
- 琉球大学では2010年度（平成22年度）より、大宜味村と協力し、**根謝銘グスク**の範囲確認のための測量調査（遺跡探査）を実施
- 2016年度（平成28年度）より大宜味村に学芸員が配置され、大宜味村では同年より試掘を開始し、2017年度（平成29年度）より文化庁の補助をうけ、遺構や遺物包含層の確認のための試掘調査を実施している。



大宜味村【沖縄県】
歴史文化基本方針

■策定年月：平成22年4月 ■人口：3221人 ■面積：70km²
■担当課：大宜味村教育委員会教育課（平成30年3月現在）

大宜味村歴史文化基本方針は、本村の歴史文化の特性をわかりやすく整理しながら、歴史文化を活かしたむらづくりの基本的な考え方を定めたものである。本村の歴史文化の基本的な認識として、また文化財をめぐる保全・活用の方針として、今後の行政計画に活用されることを目指している。

5 歴史文化を表す
つのキーワード

地域での保存継承、歴史的環境の保存継承、先人たちの技術継承
祭祀・伝統芸能の展開、根謝銘城の保存・活用

課題

- 調査・保存・継承の推進
- 地域住民の意識向上のための活動
- 観光や建設との連携、情報共有し、観光情報公開の検討

保存活用方針

- 字の歴史環境を一体的に保存継承
- 祭祀や伝統芸能による地域のつながりを村全体へ展開
- 根謝銘グスクを核として保存活用
- 自然と生きた先人の技術を継承

◆ 保存活用のための取り組み

①根謝銘グスクの文化財調査

平成28年度より学芸員が配置され、平成29年度から文化庁の補助を受け、埋蔵文化財調査を行っている。平成29年度は踏査および試掘調査を実施し、現存、遺構や遺物包含層の確認を行った。今後も継続的に調査を実施し、数年おきに報告書を発行、保存・活用に向け、検討を行っていく予定である。



②工芸技術の保存・継承

本村には重要無形文化財（工芸技術）である喜如麩の芭蕉布があり、伝承者育成事業を実施している。今後も継続して実施していく予定である。またその他の工芸技術の活用、周知展開を実施していく予定。



③指定文化財の整備・活用

平成29年度から天然記念物である田港御願の植物群落の植生調査、説明板の設置を実施した。平成30年度は引き続き、事業を実施する予定である。また、その他の指定文化財についても保存管理、普及活用を推進するため、事業展開の検討を実施する。



④普及活用・保存継承の検討

村内にある文化財を後世により永く残していくため、村の文化財指定への取組、既存文化財の村民への周知のため、展示会や文化講演の実施に向け検討していく。

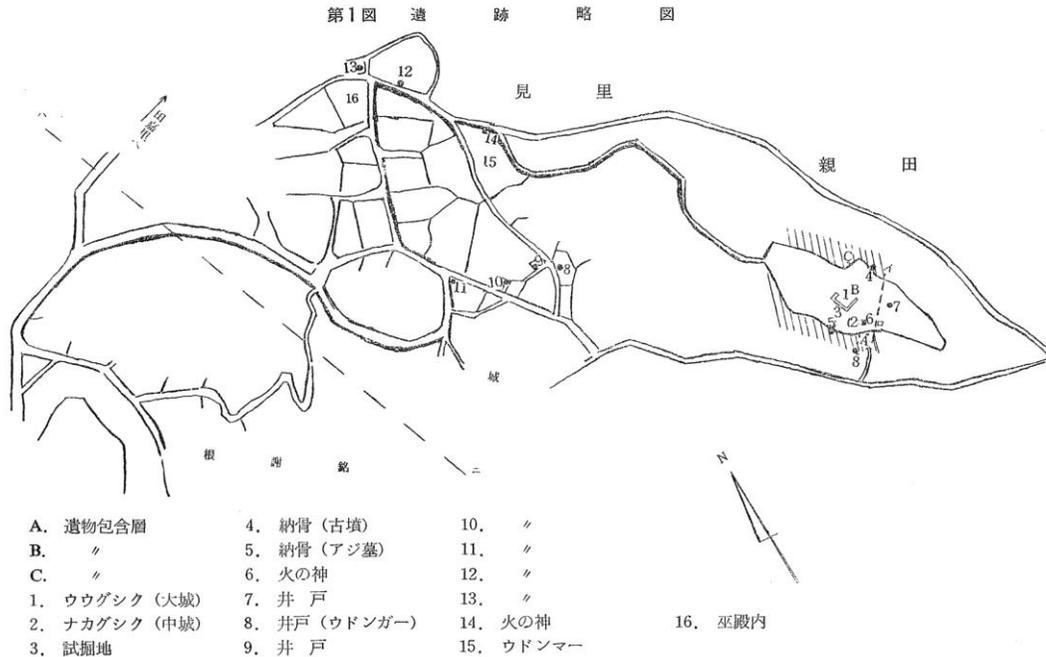


おおきみ展の事例

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishi/bunka/pdf/r1392234_86.pdfより転載・一部改変

大宜味村との連携事業

根謝銘グスクの調査



根謝銘城調査概報

宮城長信

一 はじめに
 沖縄で最も長いと云われる塩屋大橋から湾曲線の海岸沿いにおよそ六キロサバ脚を迂回したところに、今は破壊されて面影もないが大國橋・大國トンネルがあった。大國とは大宜味村と國頭村の境界を意味するものであり、大國橋に代って新設された橋を屋嘉比橋と名付けられている。屋嘉比川(田裏里川)の downstream に架けられたものであり、ヤブアインナト(屋嘉比池)の出入口に当るので、古い地名に因んで屋嘉比橋としたのであろう。その橋に立ちサバ脚につながる南の丘陵地を望むと海抜八〇メートルほどの位置に溝渠が二、三本穿れているのが見える。そこが根謝銘城(ネジャメグシク)遺跡の頂上にあたる(図版1イ)。國頭山脈から分岐して形成されるサバ脚の尾根に大きな断層部があり、そこを利用して字謝名城から字田嘉里へ通ずる道路があり、サバ脚をまわる道路が出来ぬ以前は北へ通ずる唯一の道であった。両字の境界に当る地点から謝名城側の斜面を五〇メートルほど登った中腹に小字グシク(壘)がある。城の住民は背面頂上にある根謝銘城をウイグシク(上城)と呼んでいる。遺跡からの展

望は機上からの眺めのようだ。西方眼下には嘉如嘉川が形成した水田が帯のように屈曲にのび、遠くに古宇利島・本部半島・伊江島が見渡される(図版1ロ)。東方眼下から北方へ流れる田嘉里川の両側に水田地帯が開け、川口の砂丘に宇兵が(図版1ハ)、その向うに赤丸岬(鼠の岬)、水平線上に伊是名、伊平屋を一望に収める景勝の地である。城壁を造る必要もないほど自然の断崖傾斜に恵まれ天然要害の地形をなす、支配者の居所としては最適な場所であろう。自然石を積み上げた野面積みの形跡を僅かに残すが按司の居城としては内容を思ふよしもない。そこから採集される遺物のみが往時を思ふ唯一の手がかりである。
 根謝銘城はかつて英祖王の子孫、大宜味按司の居城と云い伝えられ、民間伝承によると築城途上に外敵の攻撃を受け敗走し、城壁を築く余裕もなく廢城となったと伝えられる。また、球陽等の記録によれば、尚巴志の北山攻略に際して仲今(即ち城主の孫真良金が父祖の仇敵を討つに活躍)その次子兼松金、その妹真鶴金は大宜味按司に嫁したとある。また、尚徳が降せられ尚巴王位につく及んで第一尚氏系統の北山監督は滅びその一族は離散した。その際、城内官位にあった

宮城長信1972「根謝銘城調査報告」『琉大史学』第2号より転載

根謝銘グスクの調査は、1964年に表面調査と試掘調査が実施されている。その報告については、調査を行った宮城長信氏が1972年に『琉大史学』第2号に発表している。

根謝銘グスクとは

大宜味按司の居城

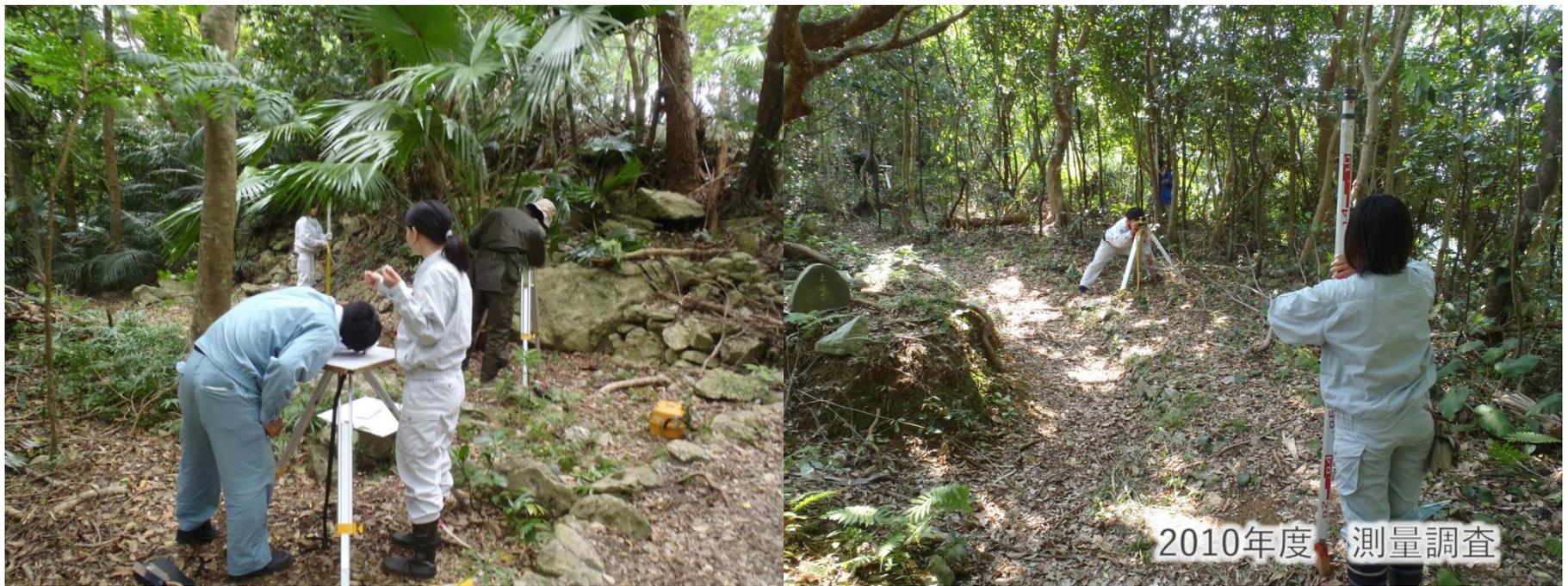
- 国頭按司の居城とする説と英祖王の子孫である大宜味按司の居城とする説がある
- 民間伝承によると、築城途上に外的の攻撃を受け、城壁を築く余裕なく廃城となったと伝えられている（「大宜味村村勢要覧2020より」）

根謝銘グスクの堀切

根謝銘グスクの調査

2010～2019年度

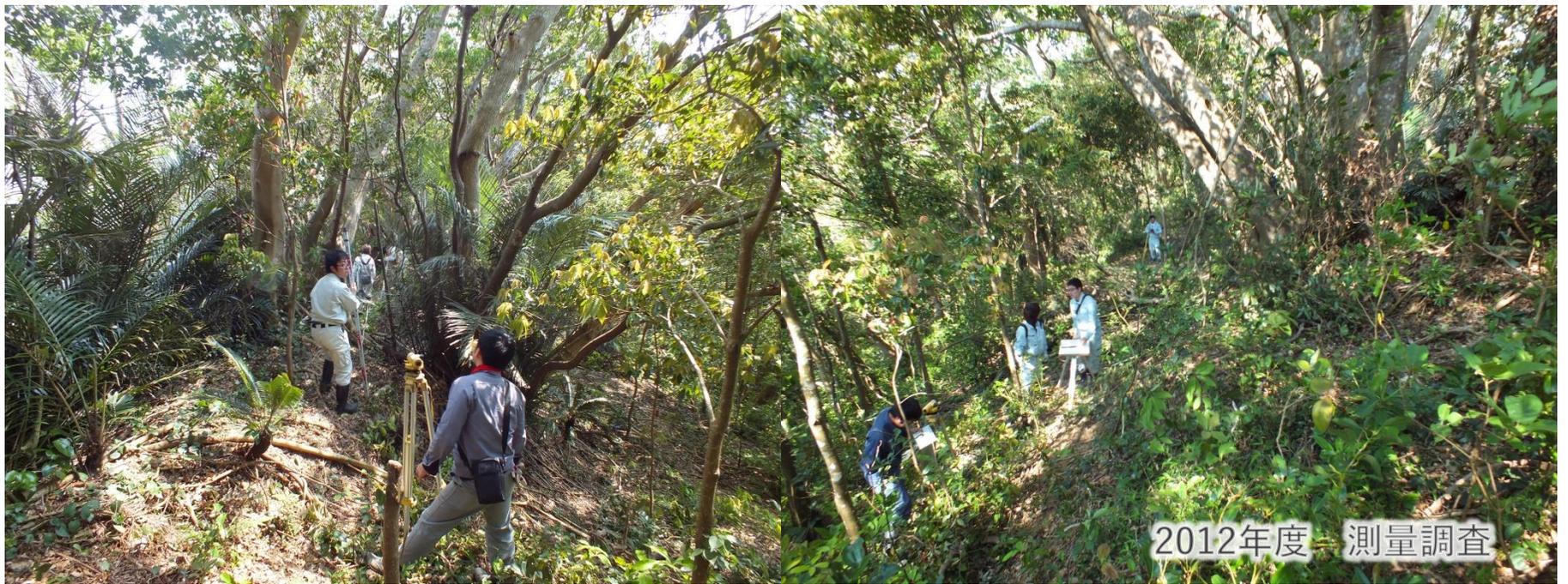
- 大宜味村教育委員会との連携
- 2010年度～2015年度・2018年度に測量調査と遺跡探査、2016年度・2017度・2019年度に試掘調査



2010年度 測量調査



2011年度 測量調査・遺跡探査





2014年度 測量調査



2015年度 測量調査・遺跡探査



2016年度 試掘調査



2017年度 試掘調査

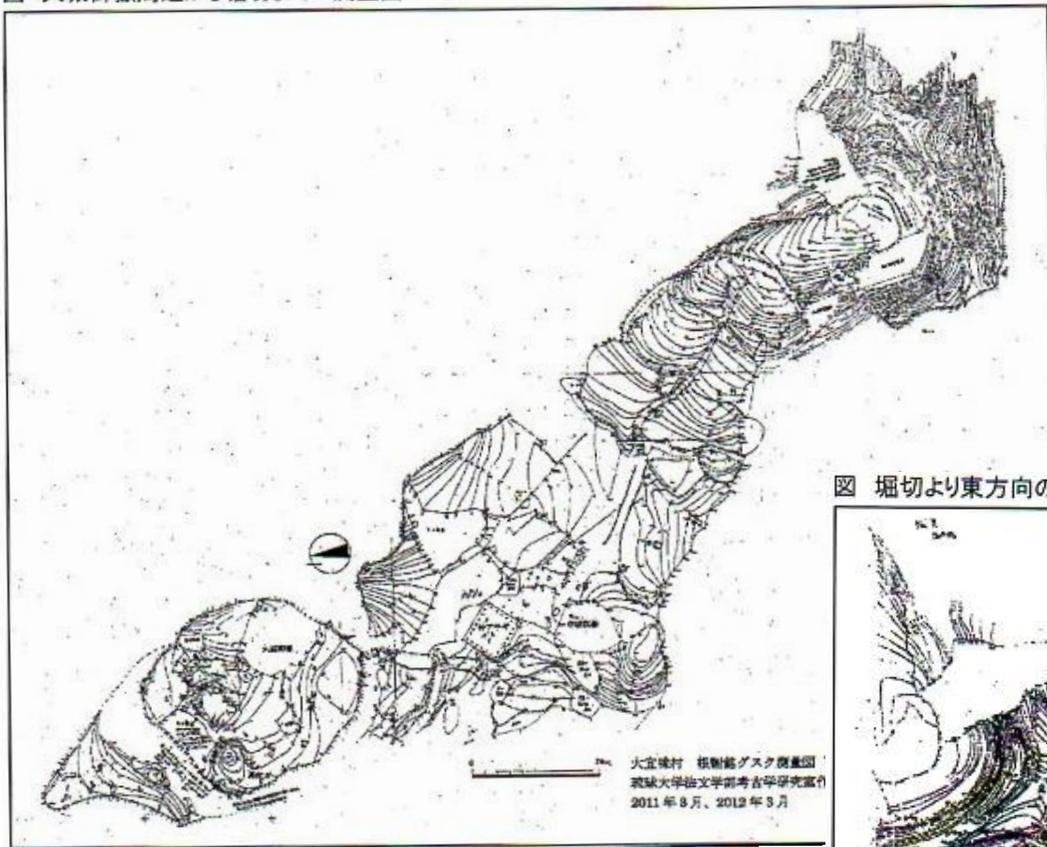


2018年度 測量調査



2019年度 試掘調査

図 大城御嶽周辺から堀切までの測量図

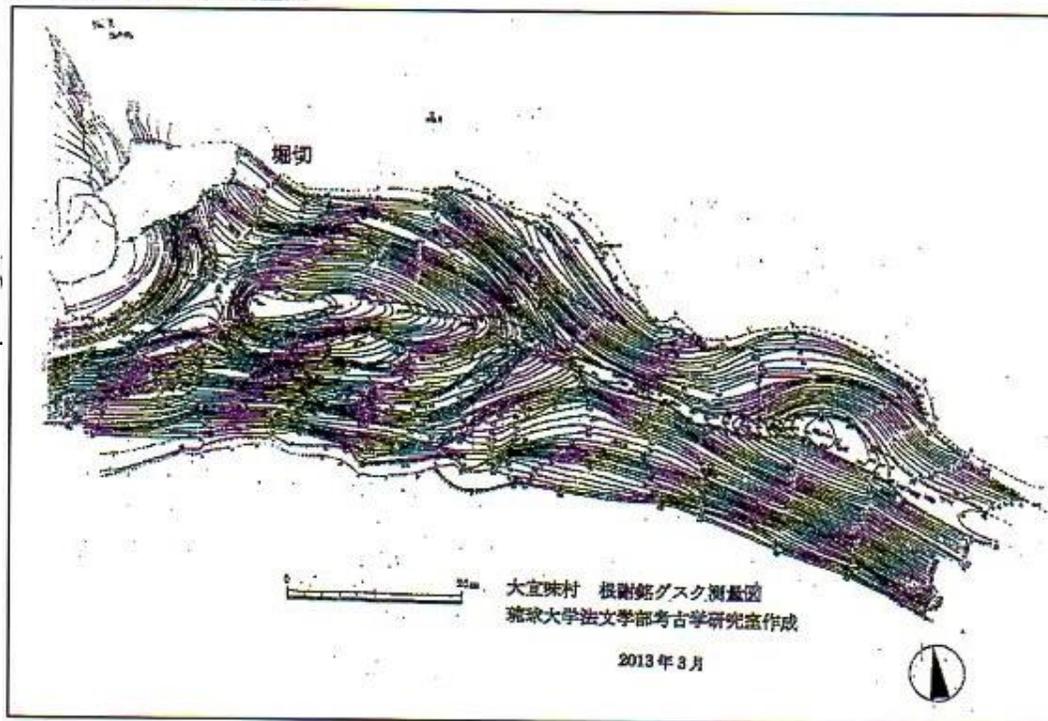


調査成果の一部

測量図の作成

測量図を作成し、グスクの構造や地形などを把握した

図 堀切より東方向の測量図



調査成果の一部

出土遺物の整理

- ・ 採集や出土した遺物の洗浄・注記・接合などを実施
- ・ 整理作業を通して、遺物の性格を把握している



南風原町との連携事業

博物館実習を通して学ぶ“地域”

南風原町

- 沖縄本島南部のほぼ中央に位置、那覇市に隣接
- 県内では唯一の海に面していない町
- 人口 約40,000人

南風原町との連携事業

博物館実習と南風原町

- 琉球大学では、学内外の強い要望により、1995（平成7）年より、博物館学関係授業を開講した。
- 現在、国際地域創造学部、理学部を中心に毎年50名前後の履修希望者を受け入れており、卒業後、沖縄県下をはじめ、全国の博物館及び文化財行政で活躍している履修者も多い。4年次に履修する博物館での実習（博物館実習Ⅱ）では沖縄県内の博物館にも協力していただいている。
- とくに地域博物館としての活動を盛んに行っている南風原文化センターでの実習は、将来、博物館学芸員としての活躍を目指す文系の履修生にとって有効なものとなっている。
- 2021年度（令和3年度）は2回に分けて8名の履修生を受け入れてもらった。コロナ禍で実習にも多くの制約がある中、充実した実習内容を提供してもらっている。

南風原町との連携事業

南風原陸軍病院壕群の調査

1994～2006年に南風原町教育委員会と連携して、南風原陸軍病院壕群の考古学的調査を実施

南風原陸軍病院壕群の調査風景※聞き取り（2004年撮影）

南風原町との連携事業

博物館実習を通して学ぶ“地域”

南風原町
南風原文化センター

南風原文化センター入館料			
区分	幼児	児童	成人
小学生	無料	100円	500円
中学生	無料	200円	600円
一般	無料	300円	700円

現在は、南風原陸軍病院壕群に隣接する「南風原文化センター」において、南風原町と連携し、博物館実習を通して地域を学んでいる



南風原文化センターの展示

沖縄戦と戦後、今を伝える

「南風原の沖縄戦」、「戦後・ゼロからの再建」、「移民」、「人々の暮らし」をテーマに展示されている



南風原町の特別展示

各地域がテーマの“字展”

東新川のゴト

東新川は新川と比べ人口の少ない地域
です。那覇市のゴミ処理場や墓地が出来た
ことによる環境の変化と独自に自治会を
平成元年一月に設立し、新川と分離しました。

東新川の 場所 人口

2008年現在
人口(男) 99人
女) 92人
世帯数 計191人
95戸

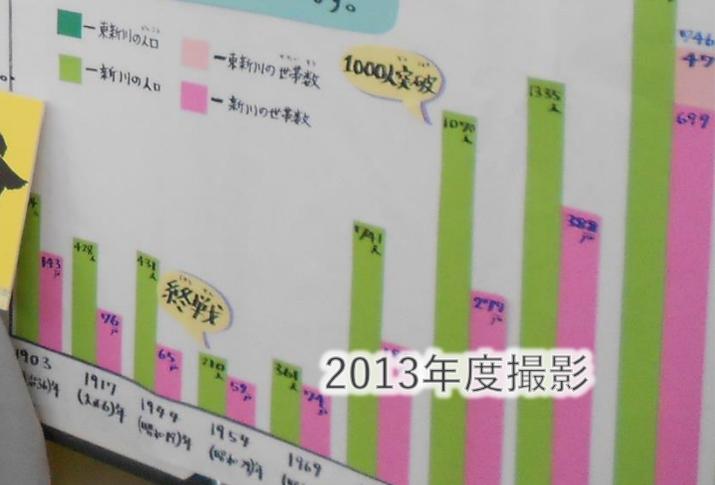
自然 コナガシマ

おんた 探りたて

民俗

南風原町の最上流...
首里高地から張り出した...
地に発達した集落だ。平野部の...
地域と盆地上の東新川地域から成り
立っている。
面積は117.4ha、人口は2435人、
世帯数は1061戸である。!!

1903(明治36)年、華城村から分村し、新川村
としてスタートした新川。戦後は300人以下まで
減少した人口も、現在では2000人を超えるまでに
なりました。ただ、この統計の人口の中には、県立南部
医療センターこそ医療センターをはじめ、新川内に
病院に入院している患者さん、老人ホームの入居者
で住民登録されている方も含まれています。
現在も各地で工事が進められている新川では、
今後も急激な人口増加が見込まれています。



2013年度撮影

- 「字（あざ）」ごとにテーマにした展示
- 各字にある公民館を展示会場にするなど、“地域密着型”の展示



字展の展示作業を博物館実習の一環としてお手伝いしている



2013年度撮影

南風原町での博物館実習

実践を学ぶ

コロナ禍のなか、今年度も感染対策をしながら、博物館実習をとおして、学芸員とし実践を学ぶ機会をいただいている

寄贈資料の登録作業 資料状態の確認 (2021年度撮影)



寄贈資料の登録作業 資料の撮影（2021年度撮影）



展示の企画・検討 (2021年度撮影)



展示の企画・検討（2021年度撮影）

“地域があってこそその文化遺産”

文化遺産は、地域によって守られ、伝えられてきたもの。
これからも地域と連携し、地域に根ざして、将来への伝えるための
お手伝いをするとともに、守り伝えている地域から学んでいきたい。



根謝銘グスク試掘調査（2019年度）